

第一節 明治前半期の美術および美術教育

本校は前述のようにフェノロサ、岡倉寛三らの日本美術復興運動の中から生まれた学校であり、従って、創立の経緯を述べるに先き立って、この運動の経緯をたどってみる必要がある。そのためには、この運動が起こる前提としての我が国の美術界の状況についても触れておかなければならない。

明治維新後の伝統美術衰微

日本美術の流れは、明治維新後の西洋美術の急激な流入によってその様相を大きく変え、やがてまた日本の近代美術としての豊かな歴史を生み出してゆくが、維新後十年ばかりの間は社会体制の改革、価値観の動揺とあいまって、まさに混沌とした状態が続いた。その間に起こった顕著な現象は日本の伝統美術の衰微と洋風美術の興隆とであった。

伝統美術の中では特に幕府や朝廷の御用絵師として長い間權威を保ってきた狩野派や土佐派の絵師たちが維新とともに没落し、ある者は転職し、またある者は俄か仕込みの洋画技法をもって世過ぎとするなど、一転して社会の底辺で呻吟する境遇に陥った。それら御用絵師たちは、制作の面では大方粉本主義に毒されて創造性を失っ

てはいたが、少なくとも伝統的絵画技法や知識、粉本類を保持してきた人々ではあった。それらも今や塵芥のごとくうち捨てられる時勢となったのである。ただ、在来流派の中では南画派の末流のみが新政府の高官などに好まれ、時ならぬ盛況を示しただけであった。そのような状況を今泉雄作は次のように語っている。

明治時代の初期は美術などは世間から殆んどかへり見られなかつた。美術などいふ語も無論使はれては居なかつたが、御維新當時は書畫などに注意するものは全く無かつたと云ふてもよい。

其の中でわづかに行はれたのは畫であるが、それも南畫ばかりであつた。南畫は所謂文人畫で唐の王維を祖とする畫風であるが、それは人材登用で引き立てられた人々の中に、京都方面の漢學者などが多かつた關係から來て居るので、その人達の中には日本畫を好む人が少かつたから、勢ひ文人の好む南畫が起つて來たのであつた。

最もおかしかつたのは其の影響で表裝の立派なものなどは賣れなくなつてしまつて、折角立派に表裝できてる物でも少し南畫風のもの、其の表裝をとつて袋表裝にしたて直して書畫屋はこれを賣つたものである。

日本畫は全く悲惨な有様で私の覺えて居るものでも、明治維新少し前には狩野探幽が書いた人物の畫幅などが三朱だなど云はれた。一朱は四百二十四文であるから三朱では十三錢位である。こんな有様であるから、それ以下の物などは殆ど問題にはなら

なかつた。之をもつて見ても日本畫のはやらかなつた事が察せられると思ふ、其の衰頹は全くもつて非常な有様であつた。其の中でひとり南畫だけは行はれたが、それさへも私が覺えて居るので一番高價であつたのは渡邊華山ワタノベの四幅物で七圓と云ふのであつた。それでさへ世間の人は偉い價が出たものなどと驚いた位である。そんな工合であるからツマライ南畫などは幾何にもならなかつた。

其時分の書畫屋は軸物が一幅二朱（八錢五厘位）に賣れると喜んで位で少々自慢をした位である。だから當時は書畫などは殆ど紙屑と同様であつた。そんな有様ではあつたが、其時分でも文晁、永海などは世の中に尊重された。

當時狩野芳崖や橋本雅邦などは實に惨めな生活をして居たもので、雅邦は海軍省の御雇か何かで十圓位の月給で地圖引をして居たし、芳崖は薩摩の藩の者に可愛がられて居たので、どうか糊口をうるほして居たやうではあつたが、全くどうして飯を食つて居るかと思ふた位であつた。

其時分の畫家などは實に憐れなもので、唯ほんに生きて居ると云ふに過ぎなかつた。私の親達が書畫を好きであつたから、文晁の門人などが宅によく遊びに來たものであるが、夫等の人達の書いたものや何かと随分あつた。而し私が佛蘭西に七年ばかり留學して居る間に、それ等は悉く賣却されてしまつた。素より幾らにもならなかつたとは思ふが、いろ／＼な物がよく持ちこまれた事を覺えて居る。

御維新の時に私は恰度十九歳であつたが、生來畫が好きで九歳

の時から日本畫を習つたものである。けれども前に述べたやうな有様であつたから、誰も相手にしてくれる者もなかつた。又一時は漢學者にならうとして十七、八歳の頃には盛に南畫を書いたものであるが、繪など書いて何になるかと云ふてよく人に笑はれたものであつた。

（『河瀬秀治先生伝』齋藤一暁著。昭和十六年四月。上宮教会発行）

右文中、橋本雅邦の苦境について言及がなされているが、雅邦の回想記（橋本雅邦翁「明治三十二年六月発行」太陽臨時増刊、明治十二傑」所収）によれば、事実それは目を覆うばかりの悲惨さである。彼は旧幕御用絵師狩野勝川院雅信（文政六年～明治十三年）門下の神足と謳われ、勝川院絵所の塾頭までつとめたが、維新後は家禄を失つただけでなく、動乱中の流浪、窮迫がもとで発狂した妻と幼な子を抱えて貧窮は極に達し、やむなく海軍兵學寮の製図の仕事に就いたのであつた。因みに『海軍兵學校沿革』所載明治四年末現在職員（製図掛）は次のとおりである。

兵學権大属 岩橋教章

兵學少属 三浦義路、中川義忠、狩野辰信、橋本雅邦

兵學權少属 林雅昭（勝靜）、狩野雅喬（勝年）、狩野昭信（勝玉）、伊藤

雅良（實太郎）

岩橋教章（天保三年～明治十六年）は狩野洞庭門人で旧幕軍艦操練所絵図方となり、維新後は海軍操練所出仕となつていたが、雅邦はこの岩橋の斡旋によつて雇われた。三浦義路（治作。勝川院塾頭。雅邦の養い親、狩野勝玉（勝川院の高弟）等々もここに雇われ、最下級の身分で測量図などを描いていたのであつた。

一方、金工家や漆工家たちの境遇もこれと大同小異であった。横井時冬は『日本工業史』（昭和四年。改造社）の中でこれを次のように述べている。

明治政府の起るや、封建制度の舊慣を破り、つとめて西洋の文物制度を輸入し、維新の大業を成就せしが、時勢の變遷は忽風俗の變遷を來たし、家屋の建築より衣服調度の類に至るまで、大むね西洋に模倣することとなりて我工業上に一大影響を及ぼせり。又これと同時に封建制度によりて領主の保護をうけし美術品より、一國の産物と稱する著名の工藝品が一時に保護を失ひたるのみならず、風俗變遷の爲需要の道を失ひしものも亦少からざりき。蓋し封建制度より開國主義の新政府にうつる過渡の時代に免るべからざる事なりとはいへ、我工業社會に一大變遷を與へたるものといふべし。ことに武器類茶器類の製造家は西洋風俗輸入のため生活の道を失ひしかば、他業に轉じて僅に飢渴を免れしとぞ。これら特種の工藝家が一時困窮をきはむるや、製劍具彫刻にて有名なる加納夏雄が煙艸入の金具を製造せしが如き、鞘塗師にて有名なる橋本市藏俗にはしといふが一種の竹模造塗を發明して煙管筒を製造せしが如き、鞍打にて有名なる名古屋の木造貞門が木細工人となりたるが如き、甲冑の鍛冶にて有名なる高岡の宮島信行支族の明珍が鐵器の鑄物師となりたるが如き類にして、又かの京都に散存する製劍具彫刻工が沈淪するをいたみ、紹美榮祐が一大工場をたて、これら彫工の爲に籠式、煤竹式の銅器を發明して西洋輸出をはじめたるが如き、長谷川

準也が金澤の製劍具彫刻工を網羅して銅器會社を起し、普通器をつくりて内外の需要に應じたるが如き、一時の急を救ひ、其特種の技藝を普通品に應用せしめたるも皆この間にありき、茶器も風俗變遷のため點茶をなすもの絶えなればかりなりしかば、かの茶碗焼に有名なる樂家が重箱類を製し、又罐子の鑄造に有名なる浪越家が鐵瓶を製するが如き、其影響する所少からざりき。これら武器茶器類の外風俗の變遷は服飾より室内の裝飾にまで影響を及ぼし、禮服の制改まりて上下地、鬘斗目地、紋付地の類忽需要を失ひ、紋付地として用ゐられし羽二重のハシカチーフ地となり、能裝束類に用ゐられし紋織物の窓掛テール掛となり、紋羽の綿フランネルに化したるが如き一々枚擧するに遑あらず、以て其變遷の甚しきを見るべし。

このような急激な社會の変化の中では名工を保護するものも無く、いわゆる大名工芸の洗練された技法も今や跡を断とうとしていた。同時に、旧支配階級が所有していた美術品は市井に流出し、二束三文で売買され、あるいは欧米人の所有に帰し、あるいは無慘に破壊された。金蒔絵の器を焼いて金だけ取ったという話まで伝わっている。また、彫刻についていうと、日本彫刻の主体をなして来た仏教彫刻は、衰えながらもその命脈が仏師たちの手で保たれていたが、慶応四年の神仏判然令から起こった排仏毀釈運動により仏師たちは致命的な打撃をうけ、また、仏教彫刻の文化遺産も少なからず損害を蒙った。その間の様子は『高村光雲懷古談』（昭和四十五年十二月。新人物往来社）その他に収録されている光雲の回顧談に詳しい。